

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4091200272
法人名	株式会社 楓
事業所名	グループホームいしまる
所在地	福岡県福岡市西区石丸2丁目4-6
自己評価作成日	平成30年11月26日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社 アーバン・マトリックス 福祉評価センター		
所在地	福岡県北九州市戸畑区境川一丁目7番6号		
訪問調査日	平成30年12月14日	評価結果確定日	平成31年3月21日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

今年度は、事業所内だけではなく外部研修や地域の催し物に積極的に参加していくことを目標に動いてきました。外部研修では、職員が毎月参加することで知識向上に努めていること、地域への働きかけとしては、町内清掃や公民館清掃、全国イベントであるRUN伴(認知症の方の禳りレー)の実行委員としての活動や協力医療機関で毎年開催されるお祭りで認知症の啓発活動等を行うことが出来ました。その他にも事業所間のネットワーク(いとのお、ろくさぼ)にも加入しており定期研修会に参加したり横の繋がりを重要視し情報共有等も行っていきます。このようなことが実践できるのも職員の離職がないことが大きな要因です。これからも働きやすい環境を整備し、地域との繋がりを大切に、入居者様のケアに活かしていきたいと思っております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

地域の様々な関係者との連携や交流を模索し、地域密着型サービス事業所としての質の確保に積極的に取り組んでいる。また、事業所役職者(主任等)の業務の整備を行い、法人全体で管理者があえて参加しない会議を開催することで、職員の主体的意識の成長やモチベーションの確保に結び付けている。これらの取り組みを通じて、働きやすい職場環境づくりに積極的に取り組み、職員体制の安定へとつなげている。排泄ケアや入浴支援、車椅子を移動の手段と捉え、生活リハビリとしての要素も意識しながら食卓やソファへの移乗がその都度行われていること等からも、入居者個々の理解と生活の質の確保に向けた自立支援への意識の高さがうかがえる。管理者の柔軟性ある対応も含め、今後の地域密着型サービスとしての存在の高まりが期待される事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
58 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	65 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
61 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果					
自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎朝、朝礼時に入居者様と一緒に唱和している。ユニット理念も適宜見直ししており、次回は来年4月に職員と一緒に話し合い変更する予定である。	事業理念は、目につきやすい場所に表示されている。朝の唱和で入居者の方々と共に共有し、日々の実践・生活に生かしている。ユニット理念をスタッフの意見を取り入れ定期的に変更するなどして理念が生きる工夫がされている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域清掃や公民館清掃、地域行事にも参加し、施設行事には地域の方々の参加を促している。同時に認知症の啓発活動や事業所の広報活動もできている。	地域行事に事業所から積極的に参加し、交流することで、地域の方々が事業所行事に協力してくれたり、参加してくれたりしている。協力医療機関のイベントやRUN伴に開催時の活動を通じて、認知症啓発活動にも取り組んでいる。地域の医療・介護事業所間ネットワーク等の活動に参加している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域行事には入居者様と一緒に参加している。また、日常の買い物なども入居者様と一緒に行き店舗の方々にも覚えてもらい声を掛けてもらっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	町内代表、家族代表、地域包括支援センターや行政職員が参加され事業所の現状報告や地域の方からの要望、包括支援センターの活動内容等を知らせている。	運営推進会議は、入居者代表、家族代表、自治会役員、民生委員、地域包括支援センター担当者等の出席を得て、定期開催されている。議事録には、それぞれの立場からの発言が残され、会議の内容がわかりやすい。今後も、更なる参加メンバーの拡充に取り組む意向である。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議やろくさぼ(第6圏域サポートチーム)での集まり、その他イベントに積極的に参加し担当者とも連絡を取り合える機会を作っている。今年は、社協とも連絡を取る機会もあった。	地域の公園新設のためのワークショップや「ろくさぼ」の活動、健康フェス参加の際に市町村から来られている担当者と積極的に情報のやり取りを行い、連絡を取り、より綿密な協力関係の実現に向け、取り組んでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束に関する知識を深め、職員間での身体拘束をしない、させない関係づくり、しっかりとしたケアの統一を行っている。	身体拘束しないとする事業所宣言だけに止まらず、対策委員会を作って防止に取り組んでいる。職員会議でも毎月取り上げ、内部研修を実施している。スピーチロック防止に職員全員で意識を高めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員の虐待に繋がる言動に注意し、個別に面談等を設けて虐待防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	月1回の勉強会で制度と活用について学ぶ機会を設けている。 後見人を活用している入居者もおられ、職員には伝えやすい環境にある。	法人内各事業所が持ち回りで担当する研修の中に計画的に位置付け、日常生活自立支援事業や成年後見制度のついて学ぶ機会を持っている。現在、制度を活用している方もおり、職員は身近な制度としてとらえるとともに、事務所やスタッフルーム、面談室等にも資料を掲示し、情報提供を行っている。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際は、専門用語は使わずゆっくりと解りやすく説明するよう心掛けている。 また、一気に説明するのではなく項目ごとに必ず質問がないか確認を取り次の項目に移っている。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関には意見箱を設置しており、普段から家族面会者も多いためそこで意見や要望を伺う機会を作っている。 また、運営推進会議の中でもそのような環境を作っている。	家族が多く集まる曜日・日程にイベントを設定し、イベント時に運営推進会議に出席できない家族との意思疎通をとるなどして、積極的に工夫して家族等意見の反映に取り組んでいる。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	定期面談はもちろん他の職員からの情報や本人の表情、態度を察し適宜面談し反映できるようにしている。 また、普段の会議の中でも意見を言う場を設けている。	職員会議、ユニット会議は月に一回開催している。会議に出られない職員からは事前に意見をもらうなど、職員意見の風通しを良くするよう対応している。日常でも管理者はできるだけ職員と交流をもち意見を聞けるように心掛けている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員個々の持つ能力に合わせ入居者の担当や委員会担当、行事担当などを付けやりがいのある環境を作っている。 今年は、雇用条件の異なる職員、役職者の業務の整備やを行った。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	年齢や資格は不問とし、やる気を重要視して採用している。 また、相談があれば職員の勤務状況も見直し働きやすい環境づくりに配慮している。	職員個々が、研修や資格取得に積極的に取組めるように日程や機会調整を行っている。費用についても、補助や立替で対応している。法人は県内各地で地域密着型サービスを展開しており、各事業所が持ち回りで研修を担当したり、副管理者及び主任のみを対象とする会議も開催される等、法人全体で職員個々の自己実現やモチベーションの確保、働きやすい職場環境づくりに取り組んでいる。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	月に一度の勉強会の中で学ぶ機会を設けており、外部研修の参加も勧めている。 研修案内も閲覧できるようにしており、職員が自ら参加希望の相談ができるようにしている。	人権学習や権利擁護、虐待、認知症ケア、コンプライアンス等、内外の研修参加を通じて、様々な視点から職員への人権教育、啓発に取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員には担当入居者や委員会を振り分け、担当活動を行っている。 また、内外研修への参加を行い、月に一度の職員会議の中での報告で参加できなかった職員への周知も行っている。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	いとの会、ろくさぼに加入し、定期的に交流会や研修会に参加している。 また今年、RUN伴や健康まつりにも参加し同業者だけでなく地域の方々との交流も行った。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	居室で一人である時や周りに人がいない時などは、そばに自分(職員)いること、いつも一人ではないことを伝え不安のない関係、環境づくりに努めている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	来館時や電話などで話す機会があれば、現状を伝え安心していただき、何か不安や困りごとがあれば聞き取り改善できるようにしている。 また、担当職員から家族に毎月本人の様子を手書きでお手紙も出している。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	事前に情報を確認した上で入居前カンファを実施し、現在の状態を見極め必要なニーズを探し出している。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	食器拭きや洗濯物たたみ等本人の日課や役割の中で職員を助けてくれる場面も多い。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	職員のための支援にとどまらず、本人のニーズに応じ家族にも通院や外出支援、馴染みの方との面会など協力していただき共に本人を支えていく関係を築いている。		
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	自宅周辺や昔行っていたスーパー、商店街に行くこともある。 また、家族の協力も得ながら兄弟や親戚、馴染みの方々に会えるよう支援しており、面会者も多い。	自宅付近、馴染みの街並みを歩いたり、ドライブしてもらったり、昔好きだった趣味を今一度体験したり、好きだった食べ物を味わいに外出したりと、これまでの関係継続に向けた支援に努めている。また、家族の協力を得ながら、旧知の方の訪問を受ける等、事業所への来訪者も多く、また訪問しやすい雰囲気づくりを大切にしていることがうかがえる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず に利用者同士が関わり合い、支え合えるような 支援に努めている	入居者の「できること」の把握に努め、入居者が 入居者を支える関係づくりの支援を行っている。 状況に合わせ配席も変えており、入居者同士が 関わりやすい環境を作っている。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関 係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族 の経過をフォローし、相談や支援に努めている	死亡退居された方の家族をイベントにお誘いし一 緒に楽しめる環境づくりを行っている。 また、家族からは入居者本人以外の身内の介護 相談もあっている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握 に努めている。困難な場合は、本人本位に検討し ている	ケアプランの内容は、本人への聞き取りを行い実 践に移すようにしている。 聞き取りが困難な場合は、家族等から情報を得る ようにしている。	できる限り本人に確認すること、確認しようと努力す ることを大切にとらえており、困難な場合は家族な ど本人に近い存在の方より情報を収集している。変 わらない本人の思いを知り、ケースごとの本人の意 向を都度しっかり考えることを重要視し、職員間で の共有認識を図る様努めている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環 境、これまでのサービス利用の経過等の把握に 努めている	入居前には必ず家族やSW、CM等から情報をもら うようにしている。 また、本人には必ず事前に会いに行きそこでいた だいた情報と照らし合わせ把握に努めている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する 力等の現状の把握に努めている	毎月実施するモニタリングで現状把握やカンファ 内で共有し、日課の見直しや計画書の修正を 行っている。 また、日々の申し送りで変化に気付くようにしてい る。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方 について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、 それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即 した介護計画を作成している	毎月のフロア会議の中でモニタリングは確実に 行っている。 SOAP形式の記録にて、いつ、誰が見ても状況が 分かるようにしている。	日々の入居者個々人の生活状況は、SOAP形式を 用いて丁寧に残されており、職員間での共有が図り やすい。介護計画には、個々の思いや嗜好、役 割、馴染みの関係継続等のニーズが具体的に盛り 込まれ、実践につなげている。毎月モニタリングを 実施し、現状の確認と見直しの必要性について検 討されている。	
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を 個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら 実践や介護計画の見直しに活かしている	ケアプランに上がっているニーズを把握した上で それに沿ってSOAP形式で記録に残している。 また、その日々の記録を基に計画書の見直しを 会議の中で行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入居者本人を支えていくためにキーパーソンの身内の方が介護が必要になったり、サービスにまつわること全般の相談を受けることもある。その際は、日頃から親交のある関係者や連絡会を通じて柔軟に対応している。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域行事、買い物、散歩などを通じて入居者様の顔を地域の方々にも覚えていただき地域交流に努めている。 また、地域行事の参加により施設外での楽しみも確保している。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族の希望を伺いかかりつけ医を決めている。 また日頃から医師だけでなく看護師や事務員とも普段から積極的に関わる機会を持ち、適切な医療を受けることができるよう支援している。	入居以前のかかりつけ医への受診は、家族との連携も図りながら支援している。また、訪問診療や看護師との連携も含め、協力医療機関との連携も密に図られている。実践的な医療連携ノートを活用し、関係者での情報共有を徹底しながら、日々の健康管理や適切な受診につなげている。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	入居者の体調や言動の変化等を医師や看護師に相談し助言を仰いでいる。 また、「医療連携ノート」を活用しそこで情報の共有を行っている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院中は、家族からの情報や職員の面会により病院関係者から情報収集を行い早期退院に向け動いている。 また、退院前には関係者や職員と退院前カンファを行い安心して退院できる体制づくりに努めている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	状況が変わったり終末期を迎えた時には、関係者と適宜話し合い情報共有を行いながら支援している。 状況に応じ、家族が理解し安心できるように事業所からと主治医からとで別々に詳しく話す場合もある。	重度化した場合や終末期のあり方については、入居時に指針をもとに説明を行い、意向を確認している。医療との密な連携や系列事業所の専門職との連携、事例の共有等を通じて、チームケアの質を高める取り組みを行っている。家族の宿泊にも対応している。	
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	専門職からの勉強会で知識を増やしたり、緊急マニュアルを掲示し迅速に動けるようにしている。 緊急時には、医師や看護師、事業所の役職者には24時間連絡が取れる体制を作り迅速な対応に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災、水害を想定した訓練を年2回実施している。 また、地域の「チョボラの会」の方々にも緊急連絡網にも入っていただいております。いざという時には協力を仰げる体制を整えている。	火災(昼夜想定)や水害等への対応を想定し、実際に地域の避難場所である公民館まで、利用者の方々と避難する等、実践的な内容が確認できる。緊急連絡網には、地域のボランティア組織「チョボラの会」の方々の協力を得ている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者一人一人の生活歴や性格等も把握しプライバシーを損ねないように努めている。	法人内各事業所が持ち回りで担当する年間研修計画の中で、接遇やマナー、認知症ケア等を取り上げ、職員個々の意識を高める取り組みを行っている。排泄ケアや入浴時の対応、時間の流れや居場所の確保等、個人の尊重とプライバシー確保に向けた意識の高さがうかがえる。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	介助に当たる際には、まず本人の気持ちを聞いた上で介助に当たっている。 また、カンファなどケアの方向性を決める際も必ず本人の気持ちを伺うようにしており、職員間だけで考え物事を決定しないようにしている。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員の業務を優先したものではなく、その日の入居者の体調や意向に沿った過ごし方をいただいている。 また、外出の希望があればできる限り応じている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	定期的に訪問カットを利用している。 髭剃りや爪切り等は日常の中で常に気を掛け行っている。 また、外出の際はお化粧など洒落を楽しめるようお手伝いしている。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	旬の食材や果物を取り入れたり、誕生日にはケーキ等を提供している。 盛り付けや食器拭き等それぞれのできることを職員と一緒にやっている。	嗜好品の摂取やパン食の日を設ける等、希望や生活習慣等に柔軟な対応が可能である。音楽の流れる中、職員も同じテーブルを囲み食事を摂っている。食後、自然に自分の食器を重ね流しにもっていく入居者も見られた。個別や全体、家族との外出時も含め、外食の機会も確保している。	
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事の内容や摂取量、時間ごとの水分量チェックを行い常に状態を把握している。 また、チェック表をもとに、その方に合った方法でその日の適切な量が確保できるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後には必ず職員の見守りや介助のもとで口腔ケアをしっかりと行っている。 また、連携歯科からは月に一度口腔衛生に関する助言や指導を行っていただいている。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	チェック表や本人のサインで排泄パターンを把握し、トイレでの排泄を促している。 また、リハパン等を使用されている方のその使用が減る取り組みを行うことも契約時等に説明させていただいている。	排泄チェック表の活用によるパターンの把握や個別のサインをくみ取りながら、トイレでの排泄を基本とする支援を行っている。誘導と併せた動作訓練を意識し、介護計画の中にも位置付けながら、排泄の自立に向けた支援に努めている。コンチネンスケアに関する外部研修に参加している。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	予防のため個別に運動プログラムを考えたり、水分摂取量の把握、おやつ工夫に努めている。 便秘が酷い方は、適宜主治医や看護師に相談し、苦しい思いをしなくていいように努めている。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	個々の体調や希望に沿って入浴を楽しんでいただけよう支援している。 朝早かったり、習慣に合わせて夜遅い時間でも対応している。	毎日入浴を準備し、希望や必要に応じて夜間帯や家族介助による入浴を実施する等、柔軟に対応している。家族の協力により、スーパー銭湯での入浴を楽しむ方もおられる。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の体調を察知し、休息やベッド臥床を行い健康管理に努めている。 また、居室には安心できるよう使い慣れた家具等を配置し家族の写真も飾っている。 夜遅くまでTVを観て寝られる方もいる。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方内容の把握に努めており、疑問点や不明点は適宜薬剤師や医師、看護師にも確認するようにしている。 また、不必要な薬についても減らしていけるように会議の中で検討している。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	「できること」「したいこと」を個人の持っている力に応じ一人ひとり役割を持って過ごされている。 お手伝いをして下さる方もいれば、趣味を活かし裁縫や編み物をされる方、イベントの際に代表挨拶や歌われる方もいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	本人の希望により近所を散歩したり買い物に出掛けたりしている。 また、外出行事を利用し普段行くことのない場所を企画している。 本人の希望を家族へ伝え外出してもらうこともある。	散歩がてら自宅周辺を訪ねたり、近隣の公園では子供たちとの交流機会もある。以前、魚釣りをしていた場所へのドライブ等、個別の支援も行われている。土用丑の日には鰻を食べに出かけたり、飾り山見物、マリンワールド等、外出行事を企画・実行している。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	預かり金があるが、希望者は現金を所持している方もいる。 また、買い物に行った際はそこで好きなものを購入し支払いも行っていただいている。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人からの希望がある時は、本人が電話をできるようにしており、その方との繋がりが途絶えないよう支援している。 本人の希望で電話ではなく手紙を出したこともある。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関には四季の花を生け、壁には皆で作ったカレンダーや折り紙等で季節を感じる工夫をしている。 花壇には花を植え、畑では野菜を育て職員と一緒に水やりや収穫を楽しむ場面もある。	平屋建て2ユニットの中央に中庭が配され、訪問時には軒下に干し柿が吊るされており、日々の活動がうかがえる。大きな折鶴が飾られていたり、イベントのポスターが掲示される等、職員の工夫と努力が伝わる。食卓やソファ等、その時々に応じたくつろぎの場所が確保されている。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファやイス、テレビや雑誌等のスペースを設け、自由に過ごせる空間を提供している。 また、ユニット内にとどまらずユニット間の行き来も好きな時にできるようにしている。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	清潔、整頓を心掛け使いやすく安全に過ごせるよう努めている。 また、使い慣れた家具や思い出の写真を飾り心地よい空間となるようにしている。	居室には、入居時に本人が持ってきた馴染みのもの、入居後に入手したお気に入りのもの等が置かれ、自分らしさを演出している。お気に入りの写真や本人が創作した絵、書、塗り絵なども飾られている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	入居者と一緒に「できること」「したいこと」を探し、役割や趣味などを踏まえ自立した生活を送れるよう工夫している。		